

全国邪馬台国連絡協議会会報

邪馬台国新聞

発行所 全国邪馬台国連絡協議会事務局
 発行者 鷲崎弘朋
 〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目2番15号
 浜松町ダイヤビル2F

Tel. 090-3218-8622
 URL <http://www.zenyamaren.org/>
 E-mail info@zenyamaren.org

会報「邪馬台国新聞」 第6号の発行によせて

会長 鷲崎 弘朋

2014年4月に発足した当会は、この10月末まで個人正会員346名(発足時75名)、19団体会員(所属約18,000名)、特別顧問27名、また全国組織として4支部体制(東京、近畿東海、中四国、九州)を展開し、ほぼ順調に発展してきました。そして、当面の目標・個人正会員400人が見えつつあり、来年2018年度は500名を視野に入れることとなります。

特別顧問は、小田静夫先生(考古学)と渡邊義浩先生(早稲田大学教授、中国史)が新たに就任され、合計27名となり8月理事会で報告されました。これだけ多くの著名な先生方に「指導をいただけるのは、当会の活動に大変心強いことです。一方で、先

生方の当会への期待もあり、それに応えられるよう活動を強化・レベルアップして行く必要があります。当会は古代史愛好家や研究家の在野の団体ですが、特別顧問の先生方のご指導を頂く研究団体でもあり、将来は法人化も目指しています。

当会の活動状況はHPやメルマガでも報告していますが、2017年は以下を実施しております。①3月4日・第1回討論型研究発表会、②3月18日・第1回東京地区講演会、③4月9日・第5回会員研究発表会、④5月14日・第5回東京支部大会、⑤5月14日・熊本県「菊池川流域古代サミット」、⑥5月21日・第2回討論型研究発表会、⑦6月24日・第6回九州支部大会、⑧7月15日・第2回東京地区講演会、⑨7月29日・第3回討論型研究発表会、⑩9月16日・第4回討論型研究発表会、⑪9月24日・第3回東京地区講演会、⑫10月9日・第6回会員研究発表会、⑬11月11日・第6回東京支部大会、⑭11月19日・第4回全国大会(奈良東大寺会場にて)、⑮11月25、26日・中国四支部大会「第1回古代史・神話ネットワークの集い」、⑯12月3日・第5回討論型研究発表会。

会報第6号目次 (敬称略)	
会長挨拶	1
各支部活動報告	
東京支部	2
事務局からのお知らせ	2
会計局からのお知らせ	2
顧問投稿	3
沓岐一郎、小田静夫、島津義昭、 関裕二、田家康、宝賀寿男、安本美典	
会員投稿	12
飯田眞理、伊藤雅文、尾関郁、福島巖 わが図書を語る	13
酒井正士	
第6回会員研究発表会概要報告	14
植田正弘、尾関郁、木本博、 酒井正士、村山智浩、山科威、	
会員研究発表会のお誘い	16
編集局だより	16

いまやネット時代となり、当会の主要テーマ①邪馬台国論(位置論と卑弥呼論)、②邪馬台国前後の歴史(通史)、③古代年表論について、在野研究者アマチュアも専門的な情報やデータがネットでも入手可能となってきました。当会としてもネット時代に対応する研究レベルを追求したいと思います。例えばHPの「私の邪馬台国論・古代史論」(一人20,000

字以内)には既に77論文が掲載され、ネットで入手したデータが多く利用されており、今後ますますネット利用が多くなり、論文のレベルも高くなると期待されます。また、大会での発表論文ではネットからのデータが大変多く使用されています。

一方、自然科学を利用した「科学的年代論」で全国の遺跡や出土物の絶対年代が明らかになれば、古代史解明が飛躍的に前進します。2010年に奈良纏向遺跡から出土した「桃の種」の炭素14年代の測定結果は近く公表されると期待しております。ただ、炭素14年代は絶対年代の幅が広いことが多く、それだけでは狭い範囲で年代を決めるのがなかなか難しいので測定事例を増やすのも重要でしょう。もう一つは、一年単位で年代を決定できる年輪年代法(特に酸素同位体比を用いた新年輪年代法)にも期待されます。ただ、出土木材を測定する必要があります。遺跡などからの木材を保管・管理している各地の教育委員会や博物館からのサンプル提供が受けられるかが鍵となります。これに対する当会の新たな取り組みも今後検討する必要があります。

新入会員ご紹介キャンペーン お知り合いの方をご紹介ください 講演会の無料招待券をプレゼント

- ・紹介者(会員)は入会希望者のお名前を教えてください。
- ・入会希望者には入会お支払い用紙に紹介者の氏名を必ず記入するようにお伝えください。
- ・紹介者には入会希望者の入金確認後に無料招待券を発送します。(入会者1名につき1枚)
- ・キャンペーン期間は2018年3月末日まで。
- ・無料招待券は全国邪馬台国連絡協議会が主催する全ての講演会・イベントが対象です。
- ・応募先 入会担当窓口のメールもしくは郵便で

zenyamaren@cm.em-net.ne.jp
 〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15
 浜松町ダイヤビル2F
 全国邪馬台国連絡協議会・入会担当係

各支部活動報告

東京支部活動報告

東京支部支部長 内野 勝弘

東京支部の2017年度活動方針は設立趣旨である

① 邪馬台国と古代史の解明

② 地域おこし、大会の実施

③ 全国ネットワークの構築

これらを推進すべく東京支部は左記の活動を行います

① 専門家、在野研究者、会員と協力して科学的探究方法での解明をめざす

② 東京地区の団体、個人会員、地域、行政、企業などと連携し講演会や地域イベント、発表会などを実施し地域の活性化に貢献する

③ 地区内の古代史団体、愛好家の会員獲得や交流、親睦などの活動を実施し合わせて収支の健全化を図る

今年11月11日(土)に第6回東京大会を主催しました。

テーマ 「東アジアからみた邪馬台国」

第一部 「古代史の取材を通じて得た日本古代国家の形成」
足立倫行先生(ノンフィクション作家)

足立先生は妻木晩田遺跡の保存委員を経て「原点に戻ろう」の趣旨に基づいて各地の発掘担当者や学者の先生を訪ね歩き、新旧の情報を入れて落差を埋め歴史の流れに近いものを確認したジャーナリストとしての古代史視点。

第二部 「殷・箕子朝鮮と伽耶と日本列島での動向」

宝賀寿男先生(日本家系図学会会長)

宝賀先生は「古代氏族系譜学」の大家であり、東アジア史の視点から総合的に日本列島の上古代史の諸問題を取り上げ、古代天皇家を含む天孫族がいつ日本列島に入りどのような活動をしたかを発表。

終了後、両先生との活発な意見交換がありました。

今後の予定は「第7回東京大会」を5月12日(土曜日)に企画しております。

当支部の課題としては

東京支部は北海道から東北、関東、上信越とたいへん広いエリアを担当しております。

東京支部会員209名(10月現在)のうち

北海道 2名 東北10名 北関東5名 上信越1名

で、191名の会員は東京、神奈川、埼玉、千葉に集中しているのが現状です。今後は各地区ごとに新規会員を増やし、地区ごとに活発な活動ができるようにして行くことが理想です。

「地区委員募集」
北海道地区、東北地区、北関東地区、上信越地区の会員の皆様から、「まとめ役」として地区運営にご参加、ご協力いただける方を募集しております。

将来、それらの地区委員が中心となり地域の古代史の普及解明につなげていければと考えております。

併せて、東京支部の運営委員は現在7名です。年間7〜8回の委員会を開催し講演会など企画・運営を進めております。

東京支部委員に参加いただける方を募集いたしております。今後とも皆さんで「全邪馬連」を盛り上げていきましょう。

事務局からのお知らせ

事務所開設について

全国邪馬台国連絡協議会は、貸事務所会社と契約を結び、会長自宅から左記の住所に事務所に移転しました。現在の契約では郵便物の取り扱いだけの機能となっています。来訪はご遠慮願います。今後は法人化にむけて登記を行い、電話その他の通信機能をそなえた事務所を目指していきたいと思っ

ています。

新住所

105-0013 東京都港区浜松町二丁目2番15号

浜松町ダイヤビル2F

会計局からのお知らせ

個人会員の会員期間を一律四月〜翌年三月末までの一年間に統一します。個人会員の年会費は三千元とし、毎年四月に徴収となります。

年度途中での入会の場合の初年度年会費は、左記のようになります。

① 四月〜七月 三千元

② 八月〜十一月 二千元

③ 十二月〜三月 千円

この変更に伴い、昨年度入会された会員の方には、本年度に限り調整した年会費(右記の区分による)でお振込み頂いております。

*更新する翌年度からは、一律三千元の年会費となります。

振込先

① 郵便局振込みの場合

郵便振替口座 00140091600752

全国邪馬台国連絡協議会

② 銀行振込みの場合

ゆうちょ銀行

〇一九店 当座預金口座 0600752

全国邪馬台国連絡協議会

問い合わせ先メールアドレス

zenyamaren@jcom.zaq.ne.jp

顧問投稿 (アイウエオ順)

私の恩師③ 陳舜臣さん

元沖縄大学教授 吉岐 一郎

神戸華僑の陳さんは戦中、大阪外語の印度語科に入学、同じ外語で司馬遼太郎さんとは1年違いだった。1924年生まれ、戦災や腹ペコを体験した世代だ。日本の大敗戦、新中国の誕生へ、華僑学生は陳さんに共産党入りを勧めたという。私の4歳年長の親友・故郭承敏さん(台湾出身2012年没)の話だが、陳さんは入党の勧めに「ぼくは勉強したいから辞退する」と断わったと話していた。「勉強したい」はまさに正解だったのだ。一時、台湾に住んだが、神戸に戻って十年余り家業を手伝う。

陳さんは2015年に卒寿90歳で他界するまで、山のような大著を書き上げた。その原典は悠久、大河のような中国五千年史であった。

私は直接には私語を交わしたことはなかったが、令妹陳妙玲さんは北京放送日本語部で一時同期僚だった。関西に住む息子さんが滋賀大に入ったのを祝った記憶がある。惜しくも彼女は還暦過ぎで亡くなった。東京では在日華僑が目立たないが、関西では早くも20世紀初めに「東西実業家番付」で三役に複数登場する財力を示していた。関東では横浜華僑が活躍していく時代だ。

陳舜臣さんの偉業を記念して、生前、「陳舜臣アジア文藝館」が神戸市の海岸近くに誕生した。ぼくは早速、浙江大学教授・王小燕さん・藤田美代子さん(故藤田友治夫人)と見学に行ったが、早すぎて満足度は小さかった。今はもう完備しているだろう。陳さんは90年代に大河ドラマ『琉球の風』が放送されたころ古希の年代、ひんばんにテレビの対談に出たり、エッセイを書いたりしている。私は大阪・福岡・沖縄

と居を移していたが、陳さんの番組はできるだけ見るようにしていた。もちろん、阪神大震災で高台の舜臣邸も例外ではなかったようだ。しかし、陳さんは淡々と歴史のひとコマという認識で風格のある語り口だった。

膨大な中国文華蓄積

その著作の山は頂上が見えないほどだ。以下、各分野の作品を概述しておく。

○推理小説 約90点(以下、初版年)

『枯草の根』江戸川乱歩賞 61年

『青玉獅子香炉』直木賞 68年 ほか

○歴史小説

『阿片戦争』67年 『秘本三国志』77年

『小説 十八史略』83年 『太平天国』82年

『中国の歴史』全15巻 『琉球の風』92年(ドラマ化)

○評論・随筆

『日本人と中国人』71年 『風を観る』01年 ほか

○翻訳

『史記』 『水滸伝』 『ルバイヤート』

○漢詩集 2冊

○対談 司馬遼太郎『中国を考える』78年、ほか

○共著

三笠宮崇仁氏ほか 10冊

○全集

『中国ライブラリー』全30巻 集英社01年 ほか

* 2

さて、陳さんは五十代の初め頃、猛烈な多作だった。連載は『サンデー毎日』の『小説 十八史略』が有名だが、ほかに『週刊朝日』『週刊讀賣』月刊では『オール読物』に『秘本三国志』などだ。このような量産のなかで座右に置いたのが陳寿の『三国志』だったという。これまでの作家の小説『三国志』(吉川英治ら)は近世の『三国志演義』の解釈

が多く、原典からの小説化の例は少ない。正史を重んじた陳さんを知る人は邪馬台国についても聞き質したのだ。周囲の人や記者が必ず聞いて来るといっわけだ(『風を観る』毎日新聞01年)。

邪馬台国の臺か壹かについて、氏はさすがに慎重だ。『後漢書』の注から660年代(白村江戦時代)に倭使に会っているはずという章懐太子の文や後の『太平御覽』の注まで調べた。後者には「倭今名邪馬惟、音訛切」とあることにも目配りする。「惟」はyiでイだというものだ。ただし、この文は90年代の初出で『隋書』の注には触れていない。私は「風水ペンタクロス(五芒星)説」(ブログあり)の清水守民によれば、『隋書』の注は「邪馬堆」でなく「邪馬惟」だと教えられている。

というわけだが、陳さんは慎重にも慎重で「邪馬台国」臺に三割方、傾いていると書いた。

* 3

陳舜臣さんの陳寿『三国志』著作は正史の中で「最も簡潔な文」だということ、小説化する意味があるとしている。小説は人情や風俗を描き、史実を補い、人間の画像に迫る意味があることだろうか。魏の曹操について新しい解釈を普及させたのも陳さんだったのはむべなるかな、といえよう。私のような入門者が曹操の詩「歩出夏門行」を知ったのも20世紀の終わりだった。

老驥、櫪に伏すとも志千里に在り。烈士暮年、壯心已まず

とかく悪く言われてきた曹操は詩人だった。陳さんは曹操を正當に評価したいという思いを加速した。前記『秘本三国志』『小説十八史略』の土台から98年『曹操―魏の曹一族』、エッセイ『三国志と中国』を記し、さらに05年『曹操残夢』へと追究の手を緩めることはなかった。

* 4

遑って、前3世紀の徐福集団渡来については何回か書いている。その基本的な考え方は、『史記』の司馬遷は徐福のやや後の人で、歴史家が東渡などの史実に注目しないはずはないというものだ。始皇帝時代のいくつかの徐福記述のほかに「淮南衡山列伝」(前124年)を記したが、その伍被は同時代人の人だった。有名な「徐福は平原広沢の地で王になって還らなかつた」の記述だ(『東の桃源郷―徐福について』94年尚文社ジャパン)。「小さな船で渡った無数の徐福もいて」とも記した。このくだりは新石器時代から稲の江南・良緒文化、河姆渡遺跡とのつながりに符合する。後の会稽―舟山列島―五島という仏教の道にも重なっている。ほかに「方士のふるさと」(『九点煙記―中国史十八景』毎日新聞80年)がある。

*

私が陳さんに出典を聴きたかつた事項が3世紀の呉の水軍東渡顛末だ。

『三国志』呉書・呉主伝に黄龍2年(230年)、孫権は東へ人狩りの大軍を出す。2將軍に万の兵をつけ、夷洲・亶洲を攻略し、無数の住民を連行せよ、というものだ。孫権は北の魏を攻めるに兵が数万も足りないのでは、はるか東方の海の彼方、繁栄しているという徐福末裔(『後漢書』倭伝・末尾)を利用しようと考えた。この大計画は失敗し、陳さんによれば、8千人が帰らず、役に立たない現地の住民3千を連れて帰つたという。翌年、あわれ2將軍は処刑されている(『呉主伝』)。陳さんは『小説十八史略』(四)「孔明亡きあと」で、「夷州は瘴癘の地で、呉から連れて行った一万の兵士のうち八千以上が疫病で死んでしまった」とした。

私は呉水軍が南九州に上陸し、西都原古墳群等を生み、多数が瀬戸内を経て関西へと移住したと考えた。「死んだ」のではなく「消えた」というものだ。孫呉の政權は暴虐で「残るも地獄、帰るも地獄」だった。夷州に残るのは「地獄」と

したのが二人の將軍の「優しさ」なのかもしれない。

夷州に残つたかれらのシンボルが「前方後円墳」とするの私論で(『新説日中古代交流を探る』89年)、刀剣研究家・竹田昌暉医師、道教研究・福永光司両氏らの学恩によるものだ。墓制思想と墓形の急激な変化・全列島普及は文明大集団渡来の合理性でしか考えられない。しかも古来の多形式の墳墓と共存しているのだ。呉の水軍は史上最大の海軍だということ強調しておきたい。

*

陳さんの六甲の丘の邸宅は大震災にも耐えたようで、テレビカメラの対談の場を提供した。中国史を想うとき、しばし陳さんの温顔を回顧する。大人の風格。今どきの90歳、未だ天寿ならず、と惜しまれるのだが。仕事をしすぎたのですね、陳さん。

―晩秋、訪中から帰つての記

日本人は海を越えてきた

東京大学総合研究博物館研究事業協力者 小田 静夫

私たちが生活している日本列島には、先史時代以来ヒト・モノ・コトバなど多くの文物が「海を越えて」やってきたことは良く知られている。では、この島国日本は、いつごろ成立したのか、また、いつごろ人類が住み始めたのか、そして、この祖先たちの生活・文化はどのようなものであつたかなど、「日本人の成立」に関する課題は多く残されている。近年、そうしたテーマに関する新しい発見や話題が取り沙汰されているので、ここに紹介してみたい。

(1) 武蔵野台地の調査でわかつたこと

日本の旧石器時代研究は、1970年代の東京・武蔵野台地の大規模緊急発掘調査によって大きく進展し、新しい旧石器研究の出発点と評されている。その特徴は、これまでの考古学調査は、遺跡を発掘し発見した遺構・遺物を研究することが主な目的であつた。しかし、近年の「緊急発掘」(行政

発掘ともいう)は、消滅する運命にある遺跡を完全に記録し保存・活用することであり、学際的組織で遺跡を解析・復原する調査方式が定着している。武蔵野台地の旧石器遺跡の調査は、こうした行政体と考古学研究者らが協力して、大きな成果を上げたものであることは忘れてはならない。

武蔵野台地には関東ローム層と呼ばれる火山灰が厚く堆積し、その中に十数枚以上の旧石器文化層が重複していた。驚くことにその石器群変遷は、列島各地で発見されていた様相を良く反映し、「日本の旧石器編年」の基礎を成した。それに、調査された200カ所以上の旧石器遺跡の内容から、彼らは小河川に面した見晴らしの良い台地上に数十人規模の集団で集落を形成し、季節的に遊動しながら狩猟・採集生活を営み、原石などの貴重品や地域の産物などの交易活動を広範囲に行つていた。

(2) 黒曜石分析で解明された最古の海上航行

1969・70年に大規模調査が行われた東京都野川遺跡出土の黒曜石石器を、東京大学で原産地と年代測定を行った結果、約2万年前に伊豆諸島・神津島産の黒曜石を使用していたことが判明した。当時、本土と太平洋沖の神津島間は、黒潮本流が北上する30km近くの海峡で、当然この島の黒曜石を採取するには、海洋を渡る渡航技術と筏舟や丸木舟などの「渡航具」が必要であつた。ちなみに、世界最古の海洋航海は、エーゲ海の約1万2,000〜8,000年前の中石器時代人の交易活動が定説であつたので、日本の2万年前の海上航行の証左は、世界の先史学界を驚かせることになった。

現在では、もっと古い3万8,000年前の神津島産黒曜石が、武蔵野台地の東京都武蔵台遺跡で確認され、日本の旧石器人たちは「世界最古の海洋航海民」であつたことが証明された。

(3) 二つの旧石器群の源郷は

武蔵野台地で確認される最古の遺跡は、約3万5,000

3万2,000年前の「立川ローム第Ⅴ層文化」である。この層相から発見される旧石器文化には、新旧二種類の石器群相が知られている。古い方は第Ⅰa亜文化期、新しい方は第Ⅰb亜文化期と呼称され、前者にはナイフ状石器、錐状石器、礫器、磨石など、後者にはナイフ形石器、磨製石斧などが伴っている。

ところが、この新旧石器群には発展的な関連は認められず、それぞれの源郷の様相を示していると考えられる。では、日本周辺の旧石器文化にその類似例は探せるのであろうか。前者は不定形剥片石器群を特徴にしていることから、東南アジアの「スンダランド」島嶼部地域に、後者は石刃技術を基本にしていることから、朝鮮半島系の旧石器文化にその系統が追跡が可能である。つまり、日本列島には、約4万年前頃に黒潮源流地域から旧石器人集団が船出して、琉球列島を経由して太平洋沿岸地域に、さらに約3万8,000年前頃に朝鮮半島から対馬海峡を渡って、二つのルートから「古本州島」に旧石器人集団が渡来したことが読み取れる。

(4) 3万年前の航海実験とは

国立科学博物館人類研究グループでは、3万年前の航海実験再現プロジェクトを立ち上げた。作業としては、琉球列島に3万年前頃に舟を利用して台湾から旧石器人が渡ってきたことを証明するもので、現地で葦舟、竹筏、丸木舟などを製作し、海上航行を試みているものである。この実験によって、日本人の祖先たちの一群は、中国沿岸から台湾を経由して、南琉球地域(石垣島・白保竿根田原人)へ、そして北琉球地域(沖縄本島・港川人)に渡来したことを証明したいというロマンがある挑戦である。

ところで、台湾と沖縄の島嶼間には、世界最強級の「黒潮本流」が北上している。約4ノットにもなる流速は、手漕ぎの舟では困難な渡航であることは、すでに伊豆諸島・八丈島の歴史で黒瀬川(黒潮本流)の激流として良く知られている。

また、科博グループの実験は成功していないが、約5万年前に旧石器人集団が東南アジアのスンダランドから、現在のニューギニア・オーストラリアが繋がっていた「サフルランド」に100km以上の海上航行を行って拡散していた事実はこの実験に希望を持たせるものである。

(5) 世界最古級の釣り針発見

沖縄県立博物館・美術館では、沖縄本島のサキタリ洞遺跡の発掘調査を数年実施していて、2016年に約2万3,000~1万3,000年前の旧石器時代の包含層から貝製の「釣り針」を発見した。これまで旧石器人が海の資源を利用した最古の証拠は、オーストラリアで約4万2,000年前の海洋魚の骨、東ティモール東部で約2万3,000年前の釣り針が発見されている程度である。このことから、沖縄の旧石器人たちが、島嶼環境の中で海洋資源を良く利用していた事実が判明したことは大きな成果であった。

不思議なことに沖縄の貝塚時代(縄文・弥生・平安期)の遺跡から、これまで釣り針の発見は二例程度で、漁撈具の主体は漁網や特殊な構築物、もぐり漁などであった。とすれば、この旧石器時代の釣り針の存在は、沖縄における漁撈技術の発達史における、重要な再吟味資料を提供したことになる。

(6) 「新・海上の道」の提唱

日本列島の先史文化を語る時、黒潮海流を介した「海上の道」は重要な文化回廊であった。かつて、日本民俗学の父と讃えられる柳田國男が想定した海上の道は、約2,000年前の縄文時代と弥生時代の境界線あたりの仮説であった。しかし、今では約3万5,000年前の旧石器時代にまで、遡って議論される時代が到来している。

日本列島は「更新世」の約2万年前の最終氷期最寒冷期には、北海道はサハリンと大陸で繋がりが津軽海峡は本州と離れていた。本州・四国・九州は繋がりが「古本州島」と呼ばれ、朝鮮半島や琉球列島とは離れていた。こうした自然環境の中

で旧石器人たちは、2万5,000年前ごろ大陸・サハリンから北海道(北海道ルート)、3万8,000年前ごろ朝鮮半島から北九州(対馬ルート)、3万5,000年前ごろ大陸・台湾から琉球列島(沖縄ルート)、この三つのルートから海を渡って古本州島に渡来してきたことが人類学・考古学分野の最新の研究で判明している。

その後、1万4000年前ごろに「完新世」に入り、海面の上昇で北海道・古本州島、琉球列島などが分離し島嶼化した。そして、フィリピン沖で発生した「黒潮本流」が琉球列島のトカラ海峡で本流が太平洋岸へ、支流「対馬海流」が九州西海上を北上し対馬海峡を通過し日本海に流入する。こうして、縄文時代早期の9,000年前ごろに、今日の「島国日本」が成立する。

「新・海上の道」は、東南アジアのスンダランドを出発したホモ・サピエンスたちが、黒潮海流を利用して琉球列島を北上し、南九州から太平洋沿岸地域へ遊動・拡散した人類史である。一方、北西太平洋を環状に分布する「黒潮文化圏」に活動した「海洋航海民」の動態が、日本文化の基層に大きな影響を与えた事実も判明し、日本列島人の遺伝子の中には、スンダランドからの南方起源の因子が強く認められることも証明されている。

火山灰に覆われた九州

— 歴史の基盤としての火山・火山灰

元九州考古学会会長 島津 義昭

火山国日本について論じてみたい。火山の働きは、温泉の噴出・硫黄等の生成など人間社会に恩恵を与える反面、火山灰・火砕流によるムラの損壊、農作物の生産性の阻害など被害も大きい。このような火山と人との関わり合いを考古学の視点から調べる「火山考古学」が近年、日本考古学界の中で注目されるようになってきた。2017年度日本考古学協会

宮崎大会でもテーマの一つとして「火山灰考古学の新展開－火山噴火羅災遺跡からの視点－」を設定、議論された。

国土技術センターの集計によると日本には108の火山があり、世界の活火山の7%を占めるという火山大国である。これらの噴火の規模は、火山爆發度指数(V.E.I.)として表され、0から8の9段階に区分されている。このうち3以上の大噴火・巨大噴火・破局的噴火による火山砕屑物は、火山編年学(テフラクロノロジー)として地層や地形の編年に役立てられている。

さまざまな火山砕屑物・火山灰(テフラ)の噴火は人間生活に少なからぬ影響を各時代に与えているが、先述のように近年考古学界では「火山灰考古学」として著しく研究が進みつつある分野である。人間生活に多大な被害を与える火山噴火の原因とするものは「災害考古学」の対象とされている。

この研究を牽引している柴畑光博(九州大学アジア埋蔵文化財研究センター研究員)さんは、火山灰(テフラ)を考古学的の研究に利用する、左記の4つの研究視点を提起している(柴畑光博「火山灰考古学の最新展開 2017年度日本協会宮崎大会研究発表資料集」)。

- ① 層位学的手法に、考古学資料の年代指標とする編年学研究
- ② テフラ堆積によって一瞬に埋没した考古資料の良好な情報を解析する同時性情報の研究
- ③ 火山噴火が人類に与えた影響について考古学資料を用いて研究する火山災害史的研究
- ④ 限定されるテフラの地理的分布域を用いて、テフラからなるあるいはテフラを含有する考古資料の産地同定に利用する研究

②のような状況を示す遺跡は、黒井峯遺跡や金井東裏遺跡下新田遺跡などの大きく報道された遺跡の他、群馬県で500か所が知られている(能登健「災害考古学の方法と展開

日本考古学協会2017年度大会 研究発表要旨 2017) 調査方法の模索やある時代の生活を瞬時に凍結したような姿は考古学に新たな知見を加えることとなった。

日本列島の半分以上を覆った火山灰のうち、第四紀後期の広域テフラとして知られている鬼界アカホヤ火山灰(テフラ)は、九州の南端・大隅半島からさらに40kmの海底で起きた爆発で、大規模な火砕流は九州南端まで到達し、天空の細かい火山灰は東北地方まで及んでいる、これについては、自然科学の分野での科学分析の進展に伴い地形や植生変化などについて多くの知見が得られている。

人文の分野では、1980年代から噴火が縄文文化に与えた影響について議論されはじめ諸説が提出されている。考古学では火山灰層を挟んで、上下から出土する土器の時代の相違について、すでに大正時代にははっきり認識されていた。著名の『通論考古学』で濱田耕作は、指宿遺跡の例を明示した(図1)。



図1 指宿(橋竿札川)遺跡の層序 (大正11年・通論考古学)

近年、柴畑光博さんは火山灰考古学的手法をもとにその課題に挑戦し、鬼界カルデラ噴火災害の実態を明らかにしようとした。『超巨大噴火が人類に与えた影響－西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として－』(雄山閣2016)を上梓された。ここに紹介しておきたい(図2)。

研究対象のアカホヤ火山灰の噴出は、年代分析の結果、暦年代では7300calBP(1950年を起点として遡るもの。5300BC)とされている。縄文時代の早期に相当する。柴畑光博さんの著作は左記の6章からなる。

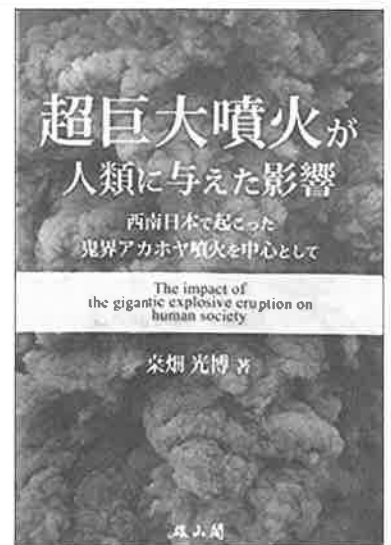


図2 柴畑光博

第1章 序論

第2章 鬼界カルデラ噴火の土器編年上での位置付けと土器様式との関係

第3章 鬼界カルデラ噴火後の環境変化と人類の対応

第4章 鬼界カルデラ噴火と他の縄文時代火山災害事例の比較

第5章 考察 第6章 結論

各章で、多岐に及ぶ自然科学の成果を咀嚼し、考古学的手法で得られた結果との整合性を追求している。土器については、鬼界アカホヤ火山灰の上下から縄文土器が出土することは学史には知られていたが、土器の型式名(様式)をめぐって諸説があった。爆発を契機に①火山灰の上下の土器型式(様式)は継続するのか、②断続(交代)するのかと言う「九州アカホヤ論争」(八洲開発文化財研究室長・木崎康弘氏命名)であった。この場合、関係する土器型式(様式)は、平栴式・塞ノ神式・轟式である。柴畑さんは諸説を検討して①説に立つ。土器論からばかりでなく、鬼界アカホヤ火山灰の等層厚線を基礎にした、AからDの4区域内の発掘で得られたデータを詳細に分析した結果、噴出元に近いA地区では相当のダメージを受ける、それ以外の地域では縄文人の生活は継続し縄文土器の形式(様式)も継続する。自然科学の成

果に最新の考古学的見解を導入した丁寧な仕事である(図3)

図3 鬼界アカホヤテフラ等層厚線 (柴畑光博2016)



以上の話は、邪馬台国から数千年前の話であったが、弥生時代から古墳時代にかけての邪馬台国各クニグニの環境基盤は、このような生態学的基础の上にあったことは記憶されており、よい事柄であろう。火山は中国文献にも記されている。「隋書倭国伝」の「隋書」は唐の魏徵撰で、唐の二代目・太宗(李世民)の貞観二年(628)に編集されたものだが、この記事に有名な左記がある。

死者斂以棺槨、親賓就屍歌舞、妻子兄弟以白布製服。貴人三年殯於外、庶人卜日而瘞。及葬、置屍船上、陸地牽之、或以小輿。有阿蘇山、其石無故火起

接天者、俗以為異、因行禱祭。有如意寶珠、其色青、大如雞卵、夜則有光、云魚眼睛也。新羅、百濟皆以倭為大國、多珍物、並敬仰之、恒通使往來。

この阿蘇は肥後阿蘇でなく、飛鳥であるという異見もある。

しかし、この記述は、阿蘇火口からみえる阿蘇山の噴火を表したものである。

阿蘇のカルデラ内(阿蘇谷)及び西に流れ出す白川流域の弥生時代終末期の遺跡から大量の鉄器が出土し、阿蘇谷では赤色顔料(ニガラ)が生産されていたことは近年の発掘調査が示している。

このような事実も実は火山考古学の分野でもあろう。今後の追求が期待される。新しい知見は随時紹介していきたい。

『上宮聖徳法王帝説』の謎

歴史作家 関裕二

NHKで二〇一七年十月に放送された歴史ヒストリアの「聖徳太子の棺(ひつぎ) 伝説のその先へ」の中で、法隆寺金堂釈迦如来像の光背銘の話が出て来た。

そのときふと思いだしたのは、『上宮聖徳法王帝説』という奇妙な文書のことだ。平安時代初期頃にまとめられたようで、長い間法隆寺の持ち物だったが、幕末にひとりの僧の手に渡り、明治十二年(一八七九)に知恩院(京都市東山区)で所蔵されるようになった。『上宮聖徳法王帝説』ではなく、元々は『上宮聖徳法王帝記』だったという有力な説もある。

何が書いてあるかというと、聖徳太子の伝記をかき集めている。法隆寺金堂の釈迦如来像や薬師如来像の光背銘、天寿国繡帳の銘文を記録し、注釈を加えている。また、聖徳太子の周辺で起きた事件を記録している。無視できないことはいくつもある。

たとえば、聖徳太子の系譜を掲げる場面、子の山背大兄王について、奇妙な「注」を副えている。「この王は賢く尊い心があつた。命を捨てて人びとを愛した」と言い、さらに、

「後ノ人、父ノ聖王「ひじりのおほきみ」ト相「あ」ひ濫

「みだ」るといふは、非「よくもあら」ず」という。つまり、後世の間は、聖徳太子と山背大兄王は親子ではないと言いつらしているようだが、これは、よくない……、という。

謎めくのは、「そんな噂、馬鹿らしくて相手にできない」と、一蹴するのではなく、「不謹慎だ」とたしなめていることだ。これは、二人は親子ではなかったことを暗に認めているように聞こえる。

あまり知られていないが、『日本書紀』も、聖徳太子と山背大兄王が親子だったなどは、言っていない。あたかもそうであるかのように印象を操作しているだけなのだ。ここに大きな秘密が隠されていて、『上宮聖徳法王帝説』は、何かを告発しようとしていたのではあるまいか。

法隆寺には謎が多い。梅原猛が『隠された十字架』(新潮文庫)の中で指摘したように、金堂に二体の本尊が祭られる。その釈迦如来像と薬師如来像の光背銘や、天寿国繡帳を、『上宮聖徳法王帝説』は全文引用し、その説明を行っているのだが、「聖徳太子は亡くなった」という事実を、繰り返し確認するという、異常な文面になっている。

「母が亡くなり、キサキが亡くなり、あとを追うように聖徳太子も亡くなられた」という話を、何度も繰り返す。『上宮聖徳法王帝説』の主題は、聖徳太子の業績を礼讃することではなく、死を確認することなのである。

よくよく考えれば、釈迦如来像の光背銘も、テーマは『上宮聖徳法王帝説』と同じだったように思えてくる。

生「さう」を出「い」で死に入るに、三「みたり」ノ主「あるじ」に随「したが」ひ奉「まっ」り

この光背銘の一節「生を出で死に入る」について『上宮聖徳法王帝説』は、「生まれるところに帰ることを言っている」と、当たり前すぎる説明を加えている。この反覆が多い。「聖徳太子は病で亡くなったのだ」と、何度も確認している。「天寿国續帳」には、「太子崩〔かむあがりま〕しぬ、大王〔おおきみ〕（聖徳太子）は、母親と約束していたかのように「從遊〔ずゆ〕したまひき〔亡くなられてしまった〕」と記録される。これについて『上宮聖徳法王帝説』は、「太子崩」の「太子」は「聖王（聖徳太子）」のことで、「從遊」とは、「死ぬるコト」と、念には念を入れて、「聖徳太子は亡くなった」と繰り返すのである。

『上宮聖徳法王帝説』は、聖徳太子の死を強調するための文書なのである。

ちなみに、『日本書紀』にある聖徳太子の崩年と光背銘その他の文書にある崩年では、一年の差がある。『日本書紀』は推古二十九年(六二二)だが、『上宮聖徳法王帝説』は、「それは推古三十年(六二二)」と言っている。このため、通説も、後者の崩年を採っている。たった百年前に亡くなった聖徳太子の崩年を、『日本書紀』は間違えたことになる。どうにも不可解だ。

もうひとつ不可解なのは、『上宮聖徳法王帝説』よりもあとにできた『上宮聖徳太子伝補闕記』という文書が、「聖徳太子は病で亡くなったのではない」と、書き残していることだ。

江戸時代の国学者・山片蟠桃は『夢ノ代』の中で、聖徳太子は蘇我馬子に殺されたのではないかと推理している。実権を蘇我馬子に握られ、推古天皇が思いのほか長命だったために、皇太子の聖徳太子は蘇我馬子を憎むようになり、蘇我馬子は先に手を打ったという。その根拠のひとつは、河内国下ノ太子(大阪府八尾市太子堂の大聖勝軍寺)の古い縁起に、聖徳太子が吐血し、家族四人が毒死したと言い伝えられてい

るからだ。毒殺のことは秘密にされていたが、同じ日に家族四人が死んだことは、ハッキリしていると言ひ、その吐血シーンは絵巻になつて残っているという(現存せず)。なぜこんな伝承が残されているのだろうか。

近年、蘇我氏見直し論が優勢になってきた。蘇我氏こそ、改革派だったのでないかというのだ。筆者もそう思う。問題は、蘇我入鹿を殺した中臣鎌足の子の藤原不比等が『日本書紀』編纂時の権力者だったことで、中臣鎌足の正義を証明するために、蘇我氏を大悪人にすり替える必要があった。

そこで考えられるトリックはひとつ。蘇我系の聖者・聖徳太子を創作し、蘇我氏の業績をかぶせ、さらに蘇我入鹿に、聖者の一族を滅亡に追い込んでもらうのだ。そうすることで、聖徳太子が聖者であればあるほど、蘇我入鹿が悪人になるというカラクリが完成する。

『日本書紀』に従えば、聖徳太子の子・山背大兄王は皇極二年(六四三)十一月に、蘇我入鹿のさし向けた軍勢に囲まれ、斑鳩で一族(上宮王家)とともに滅亡したことになる。それから二年後、蘇我入鹿は中大兄皇子と中臣鎌足の手で殺されるのだが、最大の理由は、上宮王家を滅ぼしたことだと、『日本書紀』は言う。

聖徳太子は架空の存在だったから、山背大兄王の一家も、いっぺんに蒸発してもらう必要があったのだろう。

そう考えると、法隆寺の残された数々の銘文が、「アリバ イ工作をするために、聞かれもしないことを話し出した犯人の証言」に見えてきてしまうのである。

年代論について

日本気象予報士会東京支部長 田家 康

弥生時代の開始時期は、当会でも大きなテーマとして扱われてきた。炭素14年代について、年輪・年縞で補正(較正)

することで歴年代を導き出す。この手法についての議論である。

白熱した議論になる大きな理由は、およそ3000年前から2000年前のものとなる土器に付着した炭素14の比率が安定しないためだ。もともと、炭素14は銀河系の外側から飛来する宇宙線が大気の上層で窒素原子と衝突することで生まれる。そして、およそ5730年を半減期として再び窒素に戻る性質を利用して年代測定を行うのだが、前提として大気上層で恒常的に生成される炭素14の量が不変と置かれている。実際は不変ではないため何らかの補正が必要となり、そこに様々な見解が生まれる素地があるわけだ。そして炭素14年代と較正年代をみると、2800年前頃や2400年前の前後に炭素14比率が非常に高かったことがわかる。同様の傾向は、1980年代のオランダでの研究論文にも見ることが出来る。

では、なぜこの時期に炭素14比率が高かったのだろうか？ 様々な理由が提唱されているが、素直に見れば太陽活動が低下した可能性を排除することはできない。銀河系の外側から飛来する宇宙線は太陽風が強いと吹き飛ばされ、地球の大気圏内に突入する量は減少する。反対に太陽活動が弱まれば、宇宙線が地球に飛来する量は増え、炭素14の生成量は増える。15世紀から18世紀半ばにかけて、北半球では小氷期とよばれる長期間の寒冷傾向が続いた。中でも、1420年から1570年まではシュベラー極小期、1645年から1715年はマウンダー極小期とよばれ、太陽活動が低下した極寒の時代とされた。その時代の炭素14比率は高かった。

3000年前から2000年前にかけての歴年代の特定が進むことにより、弥生時代の開始時期がいつからかと結論づけられるでしょう。私としては、その結論の中で炭素14比率が高かったとされる期間において、文献史料で寒冷化を示されているかどうか興味深い。

リヒャルト・ワーグナーのオペラ《神々の黄昏》のタイトルは、北欧神話にある「神の死」がオリジナルであり、そこには三年間極寒が続いた「フィンブルの冬」が描かれている。スウェーデンの気象学者トール・ベルシエロンは、2600年前の寒冷化傾向が伝承されたものではないかと語っている。紀元前10世紀から弥生時代が始まるとすると、水田稲作の伝来は西周王朝の成立に伴う戦乱とは無縁であり、中国東北部は諸部族が暮らす辺境の地であったという見方がある。果たして、気候の寒冷化していたのではとの視点を加えることどのような姿が描けるだろうか。

九尾狐の伝承と安倍晴明

日本家系図学会会長 宝賀 寿男

1

歴史が個別の人物ないしその集団の活動の集合成とするならば、上古にあつてはこれら特定の者とそれが属する部族・種族の活動を無視してはならない。ところが、そうした面の一部を構成する習俗・祭祀については、歴史学界ではこれまでなぜか無視されがちである。それどころか、わが国の戦後学界の主流をなしてきた津田博士流の学説では、不合理なもの、怪異なものとして総じて斥けられてきた。しかし、これは人間考察の重要な側面を欠くものとして、疑問な学問姿勢ではなからうか。

習俗・祭祀面の大きな現れとしてトーテムがある。トーテム (Totem) とは、特定の集団や人物、部族・種族や「血縁(血統)」に宗教的に結び付けられた野生の動物や植物などの象徴のことであり、トーテムを信仰の対象、基礎とし、崇拜する信仰形態が「トーテムイズム(トーテム信仰)」と呼ばれる。ところで、トーテムとされる動物は多種多様だが、これらは大別して、世界的には犬・狼・狐・熊、虎の類や竜蛇、鳥類などがあり、それが日・月や星についての祭祀とも同じよう

に絡まる。

これらトーテムのうち、最古の種族が有するものとして犬・狼・狐の信仰がある。これが、月星の祭祀ともつながって、例えば、西洋では月夜に狼男に変身するといわれ、ローマ建国の祖・ロムルス兄弟が狼の母乳で育ったとか伝え、アジアでもテムジンが「蒼き狼」とも言われる。その類が標題の「九尾狐」であり、古くは神話的な地誌『山海経』の海外東経等に見えるが、それより遙かに昔に遡って、殷王朝崩壊のもととなったともいう傾国の美女・妲己が九尾狐の化身だとまで言われる。

もともと「九尾狐」自体は、多産をあらわすなど瑞獣、靈獣だったとされ『周書』など、妲己が属する己姓の蘇氏が犬狼トーテム集団であった。中国の神話によると、華夏族の祖・黄帝の子孫に陸終なる者がおり、これが九尾虎であつて、その六男子から多くの姓氏が生まれたとされる。例えば、長子の樊は昆吾ともいい、子孫が河南省を中心に昆吾国を建て、己姓で蘇氏などの祖となった。

妲己自体はもと蘇氏から出て、殷王朝に屈服した形で帝辛(紂王)の王妃として献上されたというが、殷滅亡と共に悪女化され、西周王朝の滅亡時の幽王の妃・褒姒とともに傾国の代表的な美女・悪女とされる。ちなみに、姒姓は夏王朝の姓であつて、竜蛇信仰をもつ種族から出ており、竜が遺したと伝える液体が女兒に取り憑いて褒姒が生まれたと伝え、ともに種族のトーテムに関連する。中国の上古代では、高貴な女性の名は姓を下の方に置くから、妲己・褒姒ともに「字+姓」という構成になっている。そして、同姓娶らずの原則があつたから、夫側の帝王の股は鳥トーテムをもつ子姓であり、周のほうは巨人(熊)のトーテムをもつ姪姓であつた。

2

ところで、「九尾狐」は白面金毛といい、その靈魂は妲己

の後も長く遺り、アジア各地に飛んで、それぞれでおおいに活動し、悪事を働いたと伝える。古くはインドにおいて、マガダ国の班足太子に絡む華陽夫人になって、多数の人々を誑かし殺傷させたといい、明王朝代には伝奇小説『封神演義』のなかで取り扱われて、更に有名になり、現代の電子ゲームのなかで子どもたちにもよく知られる。朝鮮半島では、「九尾狐」(クミホ)と呼ばれる妖怪美女となり、韓流ドラマの素材にもなる。

日本では、平安後期の鳥羽上皇ご寵愛の「玉藻の前」という美女で現れる。この美女は、陰陽師安倍泰成によって正体を見破られ、後に下野国の那須高原に飛んで、湯本温泉付近の「殺生石」に化したという。殺生石の近隣の丘には那須温泉神社があつて、その境内に九尾大明神(九尾稻荷神社)も祀られる。那須の地の古代那須国造は、阿倍氏の支流という系譜を伝える。安倍泰成のほうは、名がその父の泰親とも言うが、泰親の五世の祖で陰陽道安倍家の祖・晴明の母も、和泉国の信太森の「葛の葉」という白狐で、これも「九尾狐」の化身という伝承をもつ。

この「葛の葉」が関係する信太森神社は別名を葛葉稻荷神社といい、現在の大阪府和泉市葛の葉町に鎮座する。『和泉名所図絵』には「信太杜稻荷社」と見える。この地は、『和名抄』の和泉郡信太郷であり、当地を本貫とした古族に信太首氏がいた。末裔と考えられる信太氏が鎌倉期まで御家人として見え、室町期にも活動が見える。その前の平安中期にも、長和三年(一〇一四)十月十八日付の文書には「留守所田所官人として惣大判官代信太」が証判した『平安遺文』。鎌倉期にも、正嘉二年(一二五八)の和泉国御家人着到状(和泉和田文書)には、御家人のなかに「信太右衛門尉、同神主が「取石大進房(大進法橋)」などと共に見え、当時は郷内の信太明神(現・聖神社)の神主職も保持していた。いま聖神社の東方近隣に信太森神社が鎮座する。聖神社は、

『三代実録』に見え、『延喜式』神名帳に掲載の式内社で、和泉国三宮とされる。祭神の聖大神は大歳神の御子神とされ『古事記』、大歳神は稻荷神(宇迦之御魂神)の兄とされるから、狐にもつながる。要は、安倍晴明の母と伝える葛の葉狐とは、動物に仮託されたものであっても、実態は信太首一族の女性ではなかったかという推測がなされる。

信太首氏は近隣在住の取石造氏とともに、『新撰姓氏録』和泉諸蕃にあげられ、前者は「百済国人百千(百午、百牛)、百牛」後者は「百済国人阿麻意弥」を先祖とすると記される。両者は居住状況から見て、同族であろう。取石の地いま高石市取石)は信太郷舞村(和泉市舞町)と街道を挟む位置にあるが、元禄頃、この辺りに砥芦須舞大夫二人が住み信太明神の祭礼のとき役儀をつとめ、諸役赦免の陰陽師四、五人も居て国中に曆を出すこととされ、その両役をつとめたのが聖神社の三大夫のうちの藤村家だという(『和泉市史』など)。

『姓氏録』には取石造に続いて、「葦屋村主、村主」の二氏もあげ、「百済意寶荷羅支王」の後と記載されるから、これも同族らしい。「意寶荷羅」が大加羅(大伽耶)であれば、これら諸氏の出身故地は、実際には百済ではなく、大伽耶(現在の慶尚北道の高靈郡あたり)ともなろう。「意寶荷羅支王」の後という村主氏は撰津にも居た。安倍晴明に関する伝承には、ライバルとして芦屋道満(道摩法師)なる呪術師が出てくる事情にも留意される(『宇治拾遺物語』や歌舞伎「蘆屋道満大内鑑」等だが、実在性には疑問もある)。

大伽耶の地は、新羅王都の金城(現・慶州市)の西方近隣に位置し、もとは弁辰の主要国であったが、この地域あたりを源流とした古族は新羅出身と称した例が多く、古新羅三王家の昔氏・朴氏ともども同族の可能性がある。もう一つの王家の金氏も、鳥トテムをもちつつ、大狼信仰につながる月星祭祀もしていたとみられる。

信太首氏の故地が大伽耶あたりであれば、大狼信仰につな

がる狐伝承が一族にあっても不思議ではない。古代の日本に繁衍した渡来系の秦氏は、その祖先が韓地にあつては金氏王家と同族の流れではないかともみられるが、山城の伏見稻荷大社が狐を神獣として扱い、秦氏一族の先祖には狼の争いを仲裁したと伝承をもつ秦大津父もいた。信太首氏がこうした関係の系譜をもつとしたら、外地から渡来した陰陽道の技能を安倍晴明が母系を通じて得て、これに習熟した可能性もある。晴明が賀茂忠行・保憲父子に陰陽道・天文道を学んだというが、他の素地も考えられる。祖系には、ほかに陰陽道に関係する者が見られず、安倍一族では、これより先、大同三年(八〇八)頃の陰陽頭に安倍朝臣真勝がいて、後に神祇伯を経て伊予守従四位上にもなるが、別系である。陰陽道は渡来系の呪術であり、渡来系の秦氏が中心になって広めたという見方もある。陰陽道絡みの秘術で見えるドーマン(九字切印)や九曜も尾尾狐につながるものか。

史料に見える陰陽道関係者には、百済・新羅や高句麗という韓地出身の僧が多いが、それらのなかには、新羅出身の僧・隆観(僧名甚(新羅沙門行心)の子)が還俗して金財(金宅良神亀元年(七二四)に国看連を賜姓)と名乗ったり、高句麗系らしい難波連吉成も六国史などに見える(難波連は難波吉士の後にも見える)。神護景雲元年(七六七)の天文博士国見連今虫は金財の孫くらいと推され、新羅系統の金氏は長く陰陽道や天文・曆道に関与した。秦氏一族から出た惟宗朝臣氏や愛智秦公氏の人々も、平安期の陰陽寮官人として見える。

3

安倍晴明の父系の系譜は、上記の検討からすぐには出てこない。官途の大膳大夫、左京権大夫、播磨守従四位下からは本宗一族の出とするのが割合自然だが、和泉国信太郷の渡来系一族と通婚した場合から考えると、撰河泉居住の安倍一族の出とみる可能性もないではない。大阪市の「阿倍野」は、

撰津国東成郡に属し、現・阿倍野区から住吉区にわたる上町台地南部一帯の古代からの広域地名であり、難波と大和飛鳥を結ぶ大道が縦貫した要地である。その地名の由来は諸説あつて、阿倍氏との関係を考えて良さそうでもあるが、この辺は具体的には不明である。

阿倍野区阿倍野元町の安倍晴明神社には、晴明の生誕地という伝承がある。この近隣周辺の一帯に阿倍氏の居地があつて、同区松崎町に阿部寺跡推定地があるとされ、これが阿部氏の氏寺とも考えられている。

しかし、阿倍氏本宗や一族がこのあたりに居たということも分からないから、あるいは支流の同族かもしれない。その場合、晴明に付けられた「宿祢」が同時代の史料『親信卿記』に見えることも踏まえ、「安倍宿祢」という姓氏の系譜なども併せ考えると、河内の日下首の後裔か、撰津の吉士(吉志)系統の三宅宿祢・難波宿祢の後裔かという可能性もありそうである。室町期の『園太曆』という日記には、平安朝の出来事ではあるが、寛和元年(九八五)十一月廿四日に、安倍晴明が大嘗祭で吉志舞を奉行したとの記事も残る。

吉志舞は、神功皇后によるいわゆる三韓征伐(新羅遠征が主)に従つた安倍氏の祖先がその地の舞踊を持ち帰つて大嘗祭とか住吉浜で舞つたものを起源とするともいう。神功皇后・応神天皇に絡む者では、『古事記』には敵対側の將軍として「難波吉師部の祖、伊佐比宿祢」が見える(韓地に従軍したかどうかなど不明)。

こうした習俗・技能やトテムが、古代氏族の出自解明の手がかりとなる可能性もあるから、怪異で合理的なものとは言えないと切り捨ててはならない。現伝史料に残らない古代史実の探索は難解だが、様々な資料・情報を総合的に考えていくことが必要となつてくる。

(平成二九年十月下旬に記)

二千個を越す桃の種の年代測定は、どうなった？

——天皇陛下もおたずねになった——

前産業能率大学教授 安本 美典

1 すこし旧聞になるが、二〇一〇年のことである。奈良県桜井市の纏向遺跡の大型建物跡そばの穴から二千個を越す桃の種が出土した、と報道されたことがあった。たとえば、二〇一〇年九月十八日(土)の『朝日新聞』朝刊では、以下のよう

に報じられている。まず見出しとして、「奈良・纏向遺跡 卑弥呼有力地で出土」とある。そして、次のような文章が始まる。

「女王・卑弥呼が治めた邪馬台国の有力候補地、奈良県桜井市の纏向遺跡(2世紀末〜4世紀初め)で、大型建物跡そばの穴から二千個を越す桃の種が出土した。」

そしてさらに次のようになる。

「纏向遺跡からは昨秋、3世紀前半では最大の建物跡(東西約12.4m、南北約19.2m)が見つかり、卑弥呼の宮殿とみる研究者もいる。」

「市教委は土器の形から穴は、卑弥呼と同時代の3世紀中ごろのものとみている。」

「古代中国の道教の神仙思想では、桃は不老不死や魔よけの呪力があるとされた。辰巳和弘・同志社大教授(古代学)は『卑弥呼が竹ざるに桃を積み上げて祭事を行ったのではないかと話す。』

このような報道は大丈夫なのだろうか。ここには、「2世紀末〜4世紀初め」「3世紀前半」「3世紀中ごろ」など、いくつかの年代が記されているが、それらの年代は確実な根拠をもっているのか。それらの年代が正しいかどうかをチェックできる素材が桃の種のはずである。

考古学者の関川尚功氏は、奈良県立橿原考古学研究所の所員であった方で、纏向についての、大部の報告書を執筆され

た方である。

関川氏は、つぎのように、邪馬台国大和説が、否定できることを、のべておられる。

「この(建物の)場所が纏向遺跡の中核といえる特別な地点であったかは疑問である。」

「これまでの纏向遺跡の内容をみると、そこには邪馬台国として想定したばあい、比較ができるような遺構・遺物というものが、全くといってよいほど見当たらないことに気付かされる。つまり、纏向遺跡の実体からは、邪馬台国との関連性を見出すことができないのである。」

そして、鉄器生産が端的に示しているように、庄内期後半に至るまで、一大遺跡群としての纏向遺跡自体には、北部九州を超える明確な先進性はない。

このような事実から、纏向遺跡は邪馬台国とは地域、性格、そして時代も全く異なる遺跡である、といえるのではなからうか。」

「そこにはまず、直接的な対外交流の痕跡というものが決定的に欠けていることがわかる。それは北部九州の遺跡と比較するまでもなく、『魏志倭人伝』にみえる交流実態とは、およそかけ離れたものであるといえよう。」

この事実ひとつ取り上げても、邪馬台国問題で纏向遺跡を含めた大和地域の遺跡が関わること自体が困難であることを示している。」

「弥生時代後期・庄内期の奈良盆地において、北部九州の諸国を統率し、魏王朝と頻繁な交流を行ったという邪馬台国の存在は想定することもできないのである。」

以上のように、大和地域の遺跡や墳墓にかかわる幾多の考古学的事実の示すところは、明確に邪馬台国大和説を否定している、といわざるをえないのである。」(以上、『季刊邪馬台国』126号、二〇一五年)

2

二〇一四年十一月十八日(火)の『奈良新聞』には、「古代に触れる」「両陛下が熱心に」「纏向遺跡も見学」という見出しの記事がのっている。その中に、つぎのようにある、

「両陛下は、纏向遺跡の出土遺物を見学された。纏向遺跡で出土したモモの種について『年代測定はしていますか』と質問されるなど、それぞれの遺物に強い興味を示されたという。」

そもそも桃の種は年代論上、かなり注目されている。というのは遺跡からの出土物において、炭素14年代測定法で、土器附着炭化物などについて測れば古い年代がでる。桃の種や胡桃で測れば新しい年代がでる。そして、桃の種や胡桃で測ったほうが正しい年代に近いと言われている。二千個を越す桃の種は、年代をチェックする絶好の資料の出現のようにみえる。

さらに妙なことがある。纏向遺跡から出土した桃の種についてはすでに年代が測定されているという噂が流れている。それもかなり前から言われている。しかし、一向にその結果が公表されたという話をきかない。これはどうしたことなのだろうか。

何かが発掘される度にそれを邪馬台国や卑弥呼と結びつけて解釈し、マスコミ発表をすることが繰り返されてきている。このような方法では、チェリーピーキング(自説に都合に良いデータだけを発表し、都合の悪いデータは伏せる)が疑われる危険性が多分に生じている。発掘も測定も公共の資金で行なわれているはずである。マスコミ発表を行なう前にその発掘の結果からどのようなことがいえるかについて、公平な調査や測定が、まず必要である。すでに色々な疑念が提出されている。

天皇陛下のご質問は、問題の本質をついている。たまたまのご質問が、そのような形になったのであろうか。天皇陛下

は、自然科学の素養を、お持ちの方である。そうでなければ、でてこないはずのご質問である。「頂門の一針」というべきご質問なのではないか。

桜井市教育委員会においては、公平な立場から、公表が遅れている理由が説明し、現代までに得られている測定結果がすべて公表されることを強く希望する。それとともに、すでにこのような疑念が抱かれている以上、ある特定の立場に立つと思われる機関によるものではなく、纏向邪馬台国説への疑念を抱く人も含めた第三者的な委員会よっての測定と発表が行なわれる道が開かれることを強く期待したい。

最近、将棋や碁の方面で、トップクラスの棋士にうちかっただというところで、AI(人工知能、Artificial Intelligence)が名をあげている。そのAIの分野で、「Emuハート(Emu Heart)」ということばがいわれている。「エミュレート」は、「模倣する」という意味であるが、AIの方面では、「主観や価値判断を加えずに物事をみる、推測する」ことをいうようである。機械的に推測する、データに語らせることをいうようである。

邪馬台国は、七万余戸の戸数をもつ大国であったとされている。邪馬台国問題は、データによって機械的に解答がえられる可能性が高い。

主観的な解釈を加え、それをマスコミ発表すれば勝ちという方法では、正しい結論にいたる可能性はとぼしいとみられる。

桜井市教育委員会には、天皇陛下をはじめ、多くの人々が関心をもつことに、正確にエミュレートな形で、答えていただくことを強く期待したい。

大君の みことかしこみ 桃の種
答へたまひね としつきを履ぬ

会員投稿

(アイウエオ順)

帯方郡から狗邪韓国への行程

近畿東海支部会員 飯田 真理

筆者は以前から帯方郡から「狗邪韓国」までの行程は全て水行であるとすると疑問を感じていました。「従郡至倭循海岸水行歴韓國年南年東到其北岸狗邪韓国七千餘里」この記述を「全て水行」と解釈するのは誤りです。「循海岸水行」は行程の初めだけのことで、「歴韓國、年南年東」は陸行のことと考えます。その解説を簡条書きにします。

①韓半島西南部を水行することは中継地なしにはあり得ないことです。中継地はまったく記されていません。

②この海路は最短でさえかなり長く、ましてや「海岸に循つてなら」最短の何倍もの距離になります。陸路で狗邪韓国へ行く距離のほうが圧倒的に短くしかも安全です。行程は倭人の道案内によるものでしょう。1000km以上の海路を当時の倭人の船で行くのは不可能であると考えます。(この海路がひらかれるのは、古墳時代の百済の都が泗沘に移った頃からでしょう。五く六世紀の竹幕洞祭祀遺跡がその根拠になります。)

③「歴韓國」は韓国を経由することと解釈できます。海路なら「歴韓國」にはなりません。郡使は倭人の道案内により、馬韓弁韓の国々に滞在して狗邪韓国へ向かったのでしょう。

④「年南年東」は「南へ行ったり、東へ行ったりして」ですが、海路なら「はじめが南でその後が東」です。また西向きのあるところもあります。「年南年東」を「はじめが南で次に東」と解釈される方がおられますが、それは「年(ながら)」の意味を無視する曲解です。さらに海路で倭国に行くなら、わざわざ狗邪韓国へ行く必要がな

いでしょう。

★以上より明らかでしょう。「帯方郡からはじめは海岸にそって水行で、牙山湾の現平澤港あたりで舟から降りて韓国を陸行で狗邪韓国へ到着した」ことが正しいのです。そのように考えると、帯方郡から現平澤港の地までのはじめの水行と狗邪韓国から末盧国までの水行を合わせた日数が十日にあたり、1975年の野性号での航海に要した日数と合致します。「水行十日陸行一月」が「帯方郡から邪馬台国までの日数」であるとの説をも説明できるものです。

「狗奴国熊本説」と「邪馬台国纏向説」について思うこと

伊藤 雅文

私は「魏志倭人伝」を丁寧に読み解いて、邪馬台国熊本説にたどり着いたつもりでした。しかし、そこには狗奴国熊本説がありました。今では地元の方も「熊本は狗奴国」と考えられる有力説であり、主な根拠は「熊襲」と「狗古智卑狗」とされています。しかし、邪馬台国時代に熊襲の勢力圏が熊本平野に及んでいたかは不明です。また、狗古智卑狗を架空の人物である「菊池彦」になぞらえて律令制下の菊池郡に結びつけるのは、かなり恣意的だと思われまます。このように実は強固な論拠を持たない狗奴国熊本説が定説化に向かっている背景には、邪馬台国を北部九州に比定する説の乱立があると感じます。山門説、八女説、甘木説、久留米説、吉野ヶ里説など、様々な説が論じられる度に、「その南の熊本平野には狗奴国があった」という一文がつかます。どの説も邪馬台国の比定地については各々力説しますが、狗奴国は熊本であると恐らく都合よく迎合してしまうのです。その繰り返しが狗奴国熊本説の定着につながっていると考えています。

ぜひ、「邪馬台国熊本説」の再考を求めたいと思います。また、『日本書紀』の研究をはじめ最も違和感を覚えたのが、邪馬台国纏向説です。『紀』によれば、纏向には垂仁

天皇の珠城宮や景行天皇の日代宮が造られます。倭迹々日百襲姫命の墓とされる箸墓古墳もあり、崇神天皇の磯城瑞籬宮もすぐ南の地に想定されています。そのように『紀』に描かれた舞台装置が整っている纏向の地で、大きな宮殿跡と思われる遺跡が発見された場合、普通の思考回路であるなら、まず「天皇の宮」を疑うのではないのでしょうか。それがなぜ、いきなり邪馬台国・卑弥呼の都なのでしょう。纏向一帯がヤマト王権誕生の地であることは万人が認めるところです。まずは、天皇の宮を想定した研究が進むことを願います。

(※このような思いをブログ『邪馬台国と日本書紀の界限』に綴っています。ぜひご覧ください)

遺跡や遺物は何も語らない

人が物を語って物語をつくるのダ！

― 物語の蓋然性こそキーポイントに ―

― 考古学者には邪馬台国の所在を語る資格がない、
のではないのでしょうか ―

東京 尾関 郁

推理ドラマで「遺体が語るのを聞く」と聞きますが、本当に遺体が語るのなら直ぐ解決のはず。それは事件解決の糸口をよく探せ、という意味だ。ハイ、百も承知です。

でも、考古学者が「遺跡・遺物が語ることを聞け」と言うからここで取り上げるのです。念を押しますが、遺体と同様に遺跡・遺物も語ってくれません。さらに解決の糸口は遺跡・遺物の特徴を見出すのも観察者によつて異なります。でもいくら観察能力を高めても主観の要素が多く人によつて結論は異なります。換言すれば事象は蓋然性に包まれているということ、特徴の数が増えるほど、分析が科学的で論理的であるほど蓋然性が高いと言えるに過ぎません。でも、論理論証は一理在っても全理ではなく信頼に足りません。なぜなら全理は彼岸の彼方に在って一理は明日にでも他の論理で覆され

得る、言わば激流に在る木の葉舟のようなものですから。

講演会で或る考古学者が「邪馬台国は奈良。これは客観的で常識」と述べたので、嘖みつきたい誘惑に駆られました。小さいことが気になる悪い癖！で、文献的には蓋然性はゼロですが、と言いますと「文献のことはわからない」とのことでした。『邪馬壹(蓋) 台国』の文字が発掘されていないのに考古学者がその所在を言えるはずがないではないですか。そこは文献の中だけに在るのですから文献をよく調べるのが重要なのではないのでしょうか。建物の跡や鏡の出た墓があっても、それはただ有るというだけで何も語っていません。語っているのは遺跡や遺物を強引に結びつけて物語を作っている人でしょう。失礼かもしれませんが、文献を調べない考古学者には『卑弥呼の国』を論ずる資格がない……のでは？あなたはどう思われますか。

倭国への行程が誰にも解けない理由

福島 巖

魏志倭人伝の行程の問題点は一番肝心な狗耶韓国くわにんこくを通過していないことに尽きる。魏使は半島南端のある島から対馬に行つてしまいい各地の人に道を聞いて伊都国にたどり着いた。ここを狗耶韓国と錯覚していたことを知り直ぐに狗耶韓国に引き返した。この時倭国(伽耶国)の中心は高壺に移っていた。邪馬台国は狗耶(金海)から二千里の距離にあり、魏使はここで卑弥呼に下賜品を届けたが公式の訪問記には間違えて戻つたことを書かなかつた。旅行記には別ルート、出雲まで航行して更に日本海を渡り浦項から半島に再上陸した。大邱を経由して高壺に達するものを書いた。実際に通つてなく伊都国での聞きかじりの情報だったためいくつも方向を間違えている。高壺は國譲りで出雲から戻つた人たちで大混乱状態が長年続いていた。女性リーダー卑弥呼が出現して製鉄業を起こし彼らに仕事を与えた。生活が豊かになり争いも収

まって豊かな国に蘇つた。ここは現地語で「弥烏耶馬国」…ミオII偉大な、ヤマII高壺地方一帯の意。魏ではこれを「邪馬壹国」…壹II亀、亀は倭国のシンボルで偉大なるもの意と訳した。大伽耶の基礎を作り上げた偉大な女王の墳墓を池山洞古墳群の中につつた。大きさは径百余歩(二七m)の円墳であつた。殉葬者は百余人にもなるという。半島でも殉葬者がこれほど多い墳墓は無く非常に注目される存在である。六月に金海と大伽耶跡地を見学し卑弥呼陵墓の存在を強く意識して帰つた。

倭国が韓半島にあつたことは第5号新聞にて発表済み。ミオヤマは朴炳植著「日本原記」を参考にした。

わが圖書を語る

『邪馬台国への路を推理する』 電子版250円(税別)

ブイツーンリユーション 酒井 正士

魏志倭人伝中の「距離と方向」を出来るだけ忠実に扱うことにより、邪馬台国の位置を推理しました。『周髀算経』の記述に基づき「一里II77m」とした結果、老岐から東方千二百里の洞海湾岸が未盧国、東南に五百里陸行した築上町が伊

邪馬台国への路を推理する

― 魏使は洞海湾に上陸し別府を目指した ―



酒井 正士

都國との結論に到りました。築上町から東南に百里、東に百里進んだ中津市が不彌國となりますが、不彌國で道は分岐し、右に進むと日向灘・延岡港、そのまま進むと宇佐神宮を経て別府に到ります。私の考えでは、投馬國は日向灘沿岸、邪馬台國は大分県一帯で、王都は別府市となります。別府ならば、四国西岸が「東渡海千餘里」に位置することに加え、丹砂の鉱山跡もあり、倭人伝の記述と一致します。地名の類似に拘らず行程記述を尊重することにより、新たな視点での合理的解釈ができたと自負しています。

第六回会員研究発表会概要報告

古代史とポスト真実

植田 正弘

客観的事実よりも個人的感情を重視するポスト真実が問題になっている。科学や技術の場合はポスト真実で進んだらいずれ破綻するが、古代史の分野はデータが少ないため、怪しい説でも完全に否定するのは容易でない。逆に奇抜な説ほど世間の目を引くので、ポスト真実的古代史論がはびこる宿命がある。

古代史の議論を有意義なものとするため、情報の真実度を、①真実として確認されている、②有力な関連情報からほぼ真実と判断される、③関連情報を考慮すると確からしいと思われる、④真実／虚偽どちらの可能性も有意である、⑤関連情報からは否定的だが真実の可能性が残る、⑥関連情報からほぼ真実でないとは判断される、⑦真実でないことが確認されている、の7ランクに分類した。この他に、関連情報がほとんどないため真偽の判断ができない情報Xがある。

古代史のある問題について自分の説をまとめる際には、真実度①②③の情報を中心に据え、真実度④⑤⑥⑦の情報を十分に

考察し条件付きで用いる。真実度⑥⑦の情報は使わない。情報Xは原則として使わないが、その情報を用いると全体がうまく説明できる場合は条件を付して用いる。

さらに、記紀などの情報の信頼度を、情報の種類ごにこの分類に基づいて評価した。当然ながら、全般的に時代が古いほど真実度が低下する。天皇の系譜や出来事の記述は相対的に真実度が高い。たとえば、欠史八代は架空とする説が有力だが、実在した可能性はあると考える。また、神話は史実が背景にある可能性があり、頭から否定するのはためらわれる。一方、時間情報の真実度は低く、古い時代の出来事記事は、その出来事はあったとしても、出来事が起きた時代は当てにならない。土器や埴輪の相対的な編年は真実度が高いが、絶対年代の真実度は高いとは言えない。

新しい手法《京師探索法》による

ジャマイチ国 の所在地の推定

東京都 尾関 郁

序、ジャマイチ国とは

周の時代に呉国に居た倭人達の支配者層にあつて漢字の国名を卑弥呼達が呉音で発音していたと思われる国の名です。

I、京師探索法とは

まず「京」と「都」の同義性を示し、次に京町等京地名を全国地図に印を付け、密集地域を候補地とし、それらを濾過して一番蓋然性の高い所をジャマイチ国とするのです。

II、フィルターと濾過地域

①年代。明らかに新しい京地名の東京地域は消し、京都は平安京以前の地名が見当たらないとして困難地域とします。

②帯方郡からの距離。筆者が調べた三国志の記述(倭韓は除く)から得た一里のメートル数を用いて計算し、広島以东

の岡山、奈良、名古屋、山形を困難地域とします。
③京地名の位置状況。京地域には元々地名がないとして、

右京、左京などの京の中心地名を取り除いた後の空白地域の周りに京地名がある地域とすると奈良が困難となります。

このほかに三国志の「南の狗奴国」「侏儒国」「女王国東に倭種」等の記述との整合性で山形、岡山、奈良、名古屋、及び九州内の熊本、宮崎は難しいことを付け加えます。よって相対的に北九州の蓋然性が高いと判定します。

III、帯方郡より万二千余里 水行十日陸行一月との関係
ジャマイチ国の所在地は京地名の分布図では北九州、そして帯方郡からの距離では南九州とズレているのは、南の海の島々という漢書からの観念によって南九州にあると示唆したからです。つまり倭人条の記述は、ジャマイチ国が内陸に在るとの魏への遣使や魏の使者からの報告と「海中に在る」という儒教的尚古主義の妥協的産物である、と考えます。

「里数」の理解

木本 博

里数については短里か長里かという単位の換算レベルの議論が百年続いているが、これは里数を単純に距離の単位と思っ込んでいるからだ。しかし、距離は速度と時間の積であるから、里数=速度×日数とすれば里数と日数は互いに変換可能となる。ここで、速度は交通手段に依存するが、『唐令拾遺』には「馬日七十里」や「歩日五十里」と記されている。従って、「陸行五百里」は、歩いて十日かかることを、また「陸行一月」は千五百里であることを意味している。

邪馬台国への行程で最大の問題点は不弥国から投馬国へ至る「南、水行二十日」の解釈だが、内陸の不弥国(福岡県宇美町)から水行できるわけではない。不弥国は行き止まりで、投馬国への行程は起点が狗邪韓国に戻っている。それを陳寿は「倭国の北岸、狗邪韓国」という短い注釈で的確に表現している。同様に邪馬台国への行程も起点が狗邪韓国に戻っている。また、伊都国の「郡使の往来、常に駐まる所」という

まま眠っている邪馬台国の遺跡を発見、発掘して、その実在を裏証することであろう。そのためには、綿密な計画と努力、莫大な資金と相当な時間を必要とするであろうが、その努力は、シュリーマンやヘーデンのように、必ず成功する筈である。何故なら魏志倭人伝がその所在を明言しているから。

第二の課題は、247年卑弥呼没後の邪馬台国の動向の解明であろう。この問題については、大和纏向遺跡に観察される、その存在時期や周辺部を含めた多くの状況証拠や、歴史の流れから、邪馬台国は3世紀中頃、出雲や吉備の協力を取り付けて、北九州から大和纏向に東遷し、大和王朝の成立に繋がっていった歴史の流れが明確に推論出来るのである。

今一つの問題は、倭人伝の行程記述の中で「南至投馬国水行二十日南至邪馬台国水行十日陸行一月」の記事が、邪馬台国が筑後地方に確認出来る以上、全く誤った情報であるので、その原因を解明することであろう。著者陳寿が、三国志の編纂を開始した時点では、邪馬台国は既に大和にあり、この時期相互の交流がなく正確な情報が不足の状況で、東遷の事実が不明のまま、大和への行程だけが伝達されて、筑後への行程に追加混入されたのであろうと考えると納得出来る。

会員研究発表会のお誘い

全国邪馬台国連絡協議会では会員の皆様の普段の研究成果を発表する場として、HPでの『私の邪馬台国論』『私の古代史論』のようなネット上の発表の場を設けてきました。並行して、講義をする場所として、会員研究発表会も開催しています。

会員研究発表会には毎回、約30名の参加者が集まります。発表者は30分の持ち時間で講演してもらっています。この参加者にアンケートを取り、一番好評だった人には、約1000人集まる講演会で60分の持ち時間で発表してもらいます。

今回の会員研究発表会は平成30年2月を予定しています。下記の要領で発表者を募集しています。奮ってご応募下さい。

- ① 応募締切：平成30年1月10日(水) 氏名・演題・要約を下記宛、メール・電話でご応募ください。
- ② 応募者多数の場合、抽選になります。
- ③ 会場費の分担金として、千円負担してください。
- ④ 応募・問合せ先：dh52172@nifty.com

090-1201-5200(担当：河原)
 次回は2月3日(土) 13時～17時に豊島区立生活産業プラザ(JR池袋駅徒歩6分)で行います。(参加費無料)

編集局だより

事務局長 菊池 秀夫

新会員のご紹介

全国邪馬台国連絡協議会に女性タレントが入会しました。
 志真うた(しまうた)
 お笑いタレント、歴女温泉ソムリエ、イラストレーター、お風呂アイドルOFR48メンバー。富山県黒部市出身。
 ものまねや歴史ネタ、一人コントを中心に都府のお笑いライブ・舞台・TV・ラジオ等に出演。



歴史については、男女の恋愛やエロス、偉人と温泉の関係についての知識を深めており、トークライブなどで面白く親しみやすい形で披露している。

また、コラム・記事の執筆に自らイラストを描くに留まらず、飲食店の壁絵を任されるなど、活躍の場を広げている。近年は英語・中国語・韓国語の語学習得のため勉強中。

公式ホームページ <http://shima-uta.com>
 大物タレントとして育っていくことを応援しましょう。志真さんは、お笑い芸のほか講演や司会も行ないます。お問合せは事務局・菊池(zenyamaren@gmail.com)もしくは本人に。皆で「ミス卑弥呼」として彼女を育てませんか。

劇団熱血天使「ヒミコ」公演のご案内

邪馬台国を舞台に、鬼道を行う女王卑弥呼の後継をめぐって、人々の思惑が渦を巻く古代ロマン劇です。

二〇一八年一月一〇日(水)～一四(日)

【会場】川崎市アートセンター「アルテリオ小劇場」

(小田急線新百合ヶ丘駅北口、徒歩三分)

【チケット】S五二〇〇円、A四二〇〇円、B三三〇〇円

【お問合せ】info@neketsutenshi.com

【公式HP】<http://kokorozashi-jp.wixsite.com/neketsutenshi>

(劇団熱血天使公式HPで検索できます)

今回も顧問の先生と会員から多くの投稿をいただきました。御礼申し上げます。

さて、クイズを出題します。左の写真(地図)はどこにあるのでしょうか。

正解は次号で発表します。

